

---

# 真剣に空に憧れて

A S

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣に空に憧れて

### 【Nコード】

N8881W

### 【作者名】

A S

### 【あらすじ】

「Project Genesis」「エアトレック」「塔」グラヒティ・チルドレン「軍」この四つが織り成し誕生した二人の重量子。その重力子が子供から青年になり、道を刻んでいく物語。

## Trick O Prologue (前書き)

どもA Sです。はじめてに人ははじめまして！ひさしぶりの人はひさしぶり！

今回は連載の方に挑戦してみました！一応衝動書きなのでどうなるかわかりませんが最後までやり遂げたいと思います！\*注意\*A Sはマジ恋をしたことないので矛盾している点がありますのでそのところはよろしく願います！！

## Trick 0 Prologue

冬の結晶 雪

その結晶舞い散る中まだ十歳もいかなさそうな二人の男の子と女の子がポツンと立っていた。足にはインラインスケートのような靴を履いていた。

一人は

銀髪長髪で目が真っ赤な男の子

まだ十歳もいかなさそうなのに一目見ただけで

大人や子供もすぐに振り返ってしまふような整った容姿

もう一人は

雪が降っている中

とても似合う真っ白な長髪の髪の毛と真っ赤な目が特徴の女の子

女の子も十歳いかなさそうなのにこどもらしい可愛い顔つきだった

銀髪の男の子が言う

「お前はどすんだ？」

「僕は君について行くよ。これからもずっと…」  
女の子は言った

「その前に名前を考えた方がいいな。「塔」の中では番号でよかったが外に出た以上名前が必要だしな…」

「でも、名前ってどんな風につけるの？」

「そうだな…俺は「塔」の中で観た海というのが印象に残ったからな…」

海の人

海人かいとそう呼びな。」

「わかったよ。海人」

「それで、お前はどうすんだ？」

「僕はわかんない。どうせなら海人がつけて  
女の子は首を横に振りながら言う」

「いいのか？それで？」

「うん！」

「そうだな…安直だが…小雪ってのはどうだ？お前髪の毛白いし…」

「小雪…うん！今日から私の名前は小雪！！よろしく海人！！」

「はいはい、よろしくっと、それじゃココからさっさと逃げろぞ。もうそろそろ軍のやつらが来てもおかしくないからな…」

「うん。わかったよ！海人！！」

そして男の子と女の子は

その場所から消えた……

**T r i c k O P r o l o g u e (後書き)**

後悔はしている！

そして名前がほんとに安直すぎる(涙)  
ごめんね…

Trick 1 Ten years after

Trick 1 Ten years after

神奈川県 川崎市 変態大橋の上

「ふあ~~~~~：ねむっ……」

と大きな欠伸をした白い制服を着た青年が歩いていた…

その青年は銀髪で長髪

体型はモデル顔負けのスレンダーで細型

しかし細型であつても逆に無駄な肉がない体つき

同性の男性が見ても見惚れてしまうような体型であつた

その青年の名は

鰐島 海人

チーム Yellow Rain<sup>イエローレイン</sup>を率いる総長である

「ふあ~~~~~あ、あんの糞野郎共どんちゃん騒ぎやがって思

いつきり寝不足じゃねえかよ」

「でも楽しかったから僕は良かったよ……あっウンコクスと冬馬だ！お……いウンコクス……！！」  
海人の後ろに着いてきていた白い長髪の女の子小雪が大きい声で言う。

「女の子がそんなこと言っちゃいけません！！あとおはようさん雪に海人さん。雪は元気よすぎ。昨日あんなにチームのみんなとどんちゃん騒ぎしてたつてのに……」  
眠たそうにスキンヘッドでいい人そうな井上準が答える。

「ふふふ、確かにそうですね。おはようございます。雪に海人さん」  
眼鏡をかけ肌の色が褐色の葵冬馬が言う。

「ああ。おはようさん。ウンコクス（禿）は眠たそうなのになんてめえだけ眠たそうじゃねんだ？」

「ふふふ。ぐっすり眠るコツがあるんですよと言いたいところですがさすがにその分野は専門外なのでわかりません。昨日はさすがに疲れましたからね。まだ寝むり足りないんですよ。」

「そうかい。もしもなんかコツがあったら無理やりにも教えてもらおうとおもったんだがな」

「それはいいですね。私はあなただったら私のはじ「あっ見てモモ先輩がいるよ」海人……」  
冬馬の言葉を小雪が遮って言う。

「おお、確かにいるな。しかもあれって千葉のほうでけっこ有名になってるライダーたちじゃないのか？」

「あんなウンコクズ共が、百代の相手が務まるのかよ。俺ならともかくウンコクズ程度がまとめてかかっても無理だ。つか、終わったな…やっぱり秒殺かよ」

「おお、モモ先輩つよ〜〜い」

そんな話をしながら歩いていると百代がこちらに気づいた

「お〜〜〜い、かいと〜〜〜い」

と手を振りながら言ってきた

「なんだ。ビッチ？こっちは今絶賛寝不足で不機嫌なんだが？」  
「だるそうに海人が答える」

「いきなりビッチとはなんだ〜？私みたいな美少女にそんな発言はだめだぞ」

「自分で美少女っていうやつは、糞ビッチ淫乱女で十分なんだよ」

「なんかさつきより悪口が増えてる！！」  
と準のツッコミが来た

「んで、なんだ糞ビッチ淫乱ドグソ淫乱女？」  
淫乱二回言ったよね？…と禿のツッコミが聞こえたがそんなことは気にせずに海人は言う

「さて、海人。私と戦え!!」  
ビシッ!!と海人に指をさし言う。

「なんで、俺がテメエと戦らねえといけねんだよ？」

「それは私がお前に負けて以来お前とは勝負していない!つまり、これはリベンジでもあるのだ!!」  
あとストレス解消…」

「めんどい。ねむい。つかれる。やだ。」

「なんだとっ!!お前こんな美少女がこんなにお問い合わせしているのにダメなのか!!」

「てめえは糞ビッチ淫乱ドグソ淫乱女で十分だ。いくぞ雪。冬馬。  
ウンコクズ」

「ほい」「はい」「やっぱりウンコクズなんすね…俺もつなんにも言いませんよ…(涙)」

と百代と禿の発言はスルーして海人たちは学園に向かった。

Trick 1 Ten years after (後書き)

うー

主人公の海人はエアギアの海人のイメージだから  
真似るのがむずかしいな( - | - ; )

あと

小雪の発言は曰ごろから海人といるので  
あんなセリフを吐くかな？っと思ったからです  
ガゼルがそうだったように。

## Trick 2 Momoyo and Kaito (前書き)

百代と海人の出会いの話です。

すこし変だと思えますが、そこんところは無視をお願いします！  
作者的には一子が川神院に来る前の出会いと考えています。

学校名って合ってるかな？

やっぱり未プレイはきついね(´・`・´)

Wikiではマジ恋のってないし…

それではどござー！

## Trick 2 Momoyo and Kaito

Side 海人

変態大橋でのクソビッチ（百代）のクソウゼエ発言を無視した俺たちは川神学園に到着した。

俺と雪たちは違う学年なので途中で別れた。

俺は3-Fであいつらは2-S。

自分で言うのもなんだが俺はSクラスに行けるほどの学力（東大に行けるレベル）はある。

だが

日頃から勉強をしているSクラスの優等生なやつらと俺みたいに不真面目で勉強をしなくても点数取れるやつは

Sクラスのやつらに目の敵にされるため、おもしろそうなやつらがいそうなFクラスに行った。

案の定面白いやつらは結構いたがある一人だけ面倒なやつがいる。

クソビッチ女こと川神百代だ。

十年前に俺はクソジジイもとい学園長に嵌められたおかげでクソビッチとは川神院の道場内で一回試合をしたことがある。

その時は

俺はエア・トレック履きながら百代と試合をしたが

ハッキリ言って

もう二度とあのクソビッチとは戦いたくはないと思うな

エアトレックのスピードに着いてくるあいつはどっにかしていると思う

なんとか勝ったが川神院の道場内は半壊した

その勝負以来

暇があればクソビッチから「勝負しろ！とか川神院に帰ってこい！  
！」と言ってくる

今日は勝負しろ！だけだったが

ハッキリ言っとうざいからシカトをしている

もうあんなクソメンドイことは二度とごめんだからな

Side Out

Side 百代

くそ

やはり今日もダメだったか。

海人のやつめ

こんな美少女が頼んでいるのになんてやつだ。

あいつは今日挑んできたライダーたちや武道家と違ってすごく強いからな

なんせ私に勝つぐらいだからな。

十年前私はハッキリ言って

私は同年代の中では最強だと思っていた。

他の武道家たちや川神院の門下生たちは一撃で倒せたからな  
違うと言えばじじいやルー師範代・釈迦堂さんぐらいだ。

そんな中私が道場で鍛錬をしていると

じじいが私と同年代の銀髪の男と白髪の女を連れてきた。

私は一目見ただけで銀髪のやつは強いと思った

そして私は銀髪の男に勝負をした。

その時もどうせ私が勝つと思っていたがその思いは覆された。

完敗だった。

インラインスケートみたいなものを履いていたが

私は銀髪の男のスピードに着いて行くのがやっとだった。

私の攻撃は届かず一方にやられるだけだった超回復を駆使したがだ

めだった。

気がついたときには私はベットのの上だった  
じじい以後から聞いてみたら超回復を駆使しすぎたため気絶したらしい。

そのあとに

銀髪と白髪の二人に会った。

名前のほうを聞いてみると

銀髪が海人 白髪が小雪という名前だった。

それから

約三年ぐらいはとても充実していた。

海人とは鍛錬をしながらじゃれあったり、小雪とは一緒に風呂とか入ったりした。

だが

そんなある日急に海人たちがココから出ていくと言い出した。

私は当然反対した

しかし、海人と雪は川神院を出て行った

じじいが言うには複雑な事情があるらしいが私には関係ない！

まだ説得中だが絶対に川神院には帰ってもらうからな！！海人！！

とその前にまだリベンジをやっていないからな

連れ戻すのは勝負する前に条件をつけねばいいだろう。

だが

どう勝負まで持っていくかは難しいな…

よし！こつという難しいことは舎弟に任せよう！

フッフ、首を洗っとけよ海人！！

S i d e O u t

余談だが

教室に向かう途中で海人は強烈な悪寒に襲われた。

Trick 2 Momoyo and Kaito (後書き)

セリフとかあってるかな( - | - ; )??

一応ほかのマジ恋小説を見てこんな喋り方かな?と思って書いたんですが…

あとココで協力をお願いします!

何回もしつこいかもしれませんが A Sはマジ恋未プレイ者です  
なので

マジ恋の大まかな流れを教えてください!

A S的には大まかな流れの中にオリジナルストーリーを入れたい  
と考えているのでご協力のほどお願いします!!

それでは!!

**T r i c k 3 F U C K ! ! ! ( 前 書 き )**

うーん

やっぱり海人の話し方が似てないなあー(´・`・´)

あと

短いです

**T r i c k 3 F U C K ! ! !**

S i d e 海人

3・Fの教室に向かっている途中にすさまじい悪寒が走ったが3・Fの教室に到着した。

教室に入るとクラスメイトのやつらが挨拶をしてくる。

こついう俺だが結構クラスメイトのやつらとは仲がいい。

俺は適当に挨拶を返しながら自分の席に向かった。

俺の席は教壇から見て一番右後ろの席だ。

太陽の日向がよく当たり窓を開ければ涼しい風が通る

寝るには打ってつけの席だがそれを覆すほどのマイナスがある。

それは

俺の前の席がまたあのビッチ女こと川神百代である。

本当に勘弁してほしいと思うぜ

ただでさえ

勝負しろ！なの川神院に帰って来い！だのクソウゼエし

そのうえに同じクラスで席も近いだと！！

クソが…イライラしてきた…ただでさえ昨日チームのクソカスどもがバカ騒ぎして睡眠不足つてのに…しょうがない今日は2時間目ぐらいまで寝るか…1時間目はLHRで2時間目は歴史だから寝ても大丈夫だろう…もし起こしたらぶつ殺せばいいしな…

「3-Fの鰐島海人 3-F鰐島海人今すぐ学園長室に来るように」と校内放送が流れた

ああーやべー  
マジでイライラしてきた…  
もう限界だわ…

そう思いながら俺は学園長室に向かった

S i d e 海 人 O u t

Trick 4 Two in snow 1 (前書き)

過去話です！前半と後半に分けています！

もしかしたらおかしいかもしれませんが・・・！

それでもよかったらどうぞ！！

## Trick 4 Two in snow 1

Side 海人

じじいに呼び出された俺は今学園長室前にいる。

「はいんぞ、くそじじい」

ただえさえ、朝から睡眠不足と百代でイライラしてんだ、  
もしもしょうもないことで呼び出したらわかってんだろっな。

そう思いながら俺は扉を開けた。

Side 海人 Out

Side 鉄心

海人を校内放送で呼び出した人、学長である鉄心は思っていた

思えばもう海人とは十年の付き合いかのお、あの時はビックリした  
わい。

なんせ12月の真冬の中

十もいかない子供が川神院の前に倒れておったのだからな、ワシは  
すぐに保護をした。

倒れておった子供たちを見てみるとこの真冬の中なのに黒い全身水  
着を着ていたし

足元を見てみるとインラインスケートみたいなものを履いておった。倒れた子供たちを川神院の門下生に任せて、ワシは物品を改めて見てみた。  
やはりあの子供たちが持っていた物品は黒い全身水着とインラインスケートだけだった。  
二人が履いていたインラインスケートを見てみると小さく文字が刻まれていた。

「Project Genesis No 178345」  
「Project Genesis No 195783」

ワシはこれを見たとき目を大きく開いた。

「Project Genesis」

ワシも詳しく知らないがアメリカや日本、ドイツの軍や政府の上層部が暗躍しており  
ワシよりもより強靱な肉体を持つ人間を作り出していると聞いたことがある。

都市伝説とばかり思っておったがまさか本当だったとはのう…

そして二人が目を覚ました時にワシは詳しく話を聞いた

白く長い髪をした女の子はとても怯えていた

銀髪の男の子は白髪の怯える女の子を守るようにワシと話をした。

銀髪の男の子は相手になめられないようにか乱暴な口調だった。

さすがに

「Project Genesis」の事はあまり話をしてくれなかったがある場所から逃げてきたと言った。

ワシはさらに言った

これからどうするのかと。

その問いに

銀髪の子は黙ったまんまだった。

ワシはすぐにこう言った

ならば、川神院にこないか？と

Trick 4 Two in snow 1 (後書き)

中途半端なところで区切つてごめんなさい (^ ^ | ^ ^ ; ) !!

あと

「Project Genesis No」の所はあまり意味が  
ありません

Trick 5 Two in snow 2 (前書き)

ごめんなさい!!

前半と後半に分けたと前回で言っていました

もう少し過去編(百代との戦闘シーン)に力を入れたいと思いますので

前半と後半の件はなしでお願いします!

一応

何話続くかはわかりませんがよろしくお願いします!

それでは今回は海人の心情です。

駄文だと思いますが過去編どうぞ!!

## Trick 5 Two in snow 2

Side 海斗（子供）

もう何日走り続けただろう

ただ闇雲に

俺と雪は真冬の中を必死に逃げていた

その理由は俺たちが「塔」から逃げ「軍」に追われているかもしれないからだ

いや

十中八九追われているだろう

なにせ

あのプロジェクトで最高傑作でありポンコツの雪がここにいるんだ  
追跡してなければあいつらは無能だと思う

しかし

何日間も食事を取らず走り続けたらさすがに俺達でも体力の限界が来た

「塔」の中だったら動けるのに「塔」の外に出るとまさかこんなに  
能力スペックが落ちるとは…

まあー小雪は特別だがな

だが、さすがの雪も限界のようだ…

だが「軍」が追跡していると考えると俺と小雪はただ必死に走り続

けた

気がついた時には知らない天井だった。

俺と小雪は知らずのうちにあの雪の中を倒れていたようだ。

「かいとくくく！！」

泣きじゃくるような声で小雪は俺に飛びついてきた

暑かったため俺はすぐに雪を離れた

小雪は目頭に涙を溜めて頬を膨らませながらぶうぶう言っていたが無視をした

しかし

ココは一体どこだ？見た限りどこかの武家屋敷みたいな感じだが…

そう考えていると扉が開き白髭を生やしたじじいが入ってきた

どうやらこのじじいが倒れていた俺たちを保護してくれたらしい

そのあとは

やはりというべきかどうして倒れていたのかと事情聴取をしてきたさすがに「Project Genesis」の事は言えなかったがある所から逃げてきたと言った

さすがにこれだけでは信じないと思い、どのような言い訳をすればいいか俺は頭をフル回転させたが

じじいはそうかと言って信じたみたいだ

なんだこのじじい、なぜ怪しげならない？と俺は内心思っていた  
馬鹿なのか、相当なお人よしなのかどっちかと思うがこのじじいは  
どう考えても後者気味だと思うが  
どうも信じられない

しかし

じじいはこんな質問をしてきた

これからはどうすのかと

俺は黙ったままだった

それはそうだ

結構長時間眠ったので

「軍」の追跡者がココにきているかもしれない

そう思いながら考えていると

じじいはこんなことを言ってきた

「川神院にこないか？」と

俺は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしたのは自分でもわかるくらい驚いているのがわかった

**T r i c k 5 T w o i n s n o w 2 (後書き)**

うーんどうしてもキャラクターの心情に言ってしまうので  
キャラクターが全然話してない(;|:)

次回は

キャラクターにセリフを言わせたいです。

「何が目的だ？」

俺はそう言った。考えてみればこのじじいは本当にどうかしていると思う

身元の不明な子供が真冬の中を倒れており保護しそしてココに來いだと…

何か目的があるとしたか考えられない。

「フオフオフオ、ワシはただ単にお前たちを保護したいだけじゃ。

ワシにもお前と同じ年ぐらいの孫娘がおつての。このまま真冬の中をまた放置したままにするのは心が痛いだけじゃい」

「……………」

俺と小雪は黙ったまんまだった

「フオフオフオ、いきなりそう言われれば困惑するじゃろつな。それじゃあこう言えいいかの？ワシは川神鉄心じゃ」

「……………」

衝撃が走った

「川神鉄心」そうこのじじいは言った…

まさかこのじじいが川神鉄心だとは…

「川神鉄心」

「Project Genesis」の計画は現代世界最強武術家川神鉄心の体のスペックを手に入れるのが計画の一つでもあった

「だったら尚更だ。てめえはどうやら「Project Genesis」の事を知っているようだな。わかってんだろ？もしも保護するんだったら誰に狙われるのかを…」

「プロジェクトの事はあんまり知らなかったから驚いたがの。誰かに狙われる事なら心配いらなわい。ココはさつきも言った通りココは川神院じゃ。そうそうあやつらは手は出されないじゃろう？言い方を変えればココは世界中で一番安全な場所じゃ？お前たちにはとても魅力的な場所じゃろ？」

「……………」

確かにそうだ。ココには現代最強武術家の川神鉄心がいる。

そうそう「軍」が手を出せるとは思えない。

そして、「軍」の奴らは俺たちがどこか山奥や人気のない所に行くと思うはずだ。

まさかこんな所にいるとは思はず…

俺はそう頭の中でメリットデメリットを考えた。

そう考えた結果俺の答えは決まった。

「わかった。あなたの保護を受けさせてくれ」

Trick 7 Two in snow 4 (前書き)

「Trick 0 Set up」は消させていただきました。

前にも言った通り

この小説は衝動書きで描き始めたものなので  
マジ恋のストーリーなどをちゃんと勉強して、  
いろいろ流れを決めたらまた書きたいと思います。

ほんとに

ごめんなさい…

## Trick 7 Two in snow 4

じじいの案に乗った俺と小雪はじじいと川神院の中を歩いていた。

「なあ？どこに向かってるんだ？」

「フオフオフオさつきも言った通りワシには海人や小雪と同じ年の孫娘がおつての今道場で稽古をしてるのでな  
稽古を見るついでに顔合わせじゃ」

じじいはそう言った。

あと、じじいが俺たちの名前を呼んでいるのはさつき名前を教えたからだ。

最初は海人君や小雪ちゃんと言っていたがむず痒くなったので呼び捨てにさせた。

「フオフオフオ、ついたぞ」

そしてじじいは道場の扉を開けた

道場の中に入ってみると

俺と小雪と年代ぐらいの女の子が型の練習をしていた

髪はセミロングで肩にかかるぐらいの綺麗な黒髪でスレンダーな体型をしていた。

俺的に将来は美人になると思う

「じじい、そいつら誰だ？」

黒髪の子が言ってきた

「フオフオフオ、今日からココに住む子たちじゃ名前は銀髪の子が海人。白髪の子が小雪じゃ」

「よろしくな」

「よろしくね」

「川神百代だ。よろしくな」

じじいの孫娘と聞いていたが何か理解不能な事をしてくるのかと思いきや

何気に礼儀が正しいことにビックリした。

だがその考えは予想道理当たった

「銀髪の…ええーと海人だったけか？お前強いだろう？私と戦え！

」！

「はっ」

予想外であり唐突すぎて俺は意味がわからなかった。

Trick 7 Twin snow 4 (後書き)

次回は戦闘シーンかな

ちゃんと書けるか果てしなく不安です…

そして次回から不定期更新になるとおもつのでよろしくお願いします

> m ( m <

一応

週に2・3回を目安にがんばっていきたいです!!

Trick 8 Two in snow 5 (前書き)

戦闘描写って難しいですね…

どう書けばいいかマチわからないっす…

川神院 道場内

本当にどうしてこうなったと海人はふと思う

じじいに連れられて目の前にいる少女川神百代と顔合わせだけの話  
だけだったはずだ

それが今はどうだ？目の前にはつい先ほど顔合わせをしたばかりの  
少女川神百代がなぜか体をウズウズと動かしていた

「おい？俺の気のせいか？今戦えって聞こえたんだが？」

「フフフ気のせいではない私はちゃんと戦えと言ったぞ」

どうやら俺の気のせいではなかったらしい

「今しがた顔合わせしたやつに戦えってお前頭のネジ取れてんじや  
ねえのか？」

「失礼だなお前？私の頭のネジは取れていない！！」

「頭のネジが取れている以外そんな発言はしねえーよ」

「フオフオフオ、まあー落ち着きなさい」

このままでは埒が明かれないと思ったのか鉄心が会話に入ってきた

「して、百代？なぜいきなりそんなことを言ったのじゃ？」

「なぜだとじじい？早い話そいつらが強いから言ったまでだ。立ち方がそうだお前たち武術を嚙んでいただろう？しかも相当な種類だ。だが小雪より海人が強いと思ったから言ったまでだ」

「……」

こいつ一見ただけで気づいたのか…

確かに「塔」にいた時は俺と小雪はさまざまな訓練を受けていた気づかれないようにうまく隠していたと思ったんだがな…

「だと言っているが？どうするんじや海人？」

「ああ。いいぜ。受けてやるよ」

「海人！！」俺の後ろに隠れていた小雪が少し大きな声で言う

「大丈夫だ。「塔」の中と外の違いを少し確認してくるだけだ」

「でも…」

「大丈夫だ」

「じじい。俺たちが履いていた靴はどこにある？」

「フオフオフオ今取りに行ってくるぞい」

5分後

エアトレックを履いた俺は川神百代と向かい合っていた

「ローラースケートみたいな靴を履いてなめているのか？」と百代は不機嫌な声で言う

「大丈夫だ。問題ない」

「フオフオフオ、

それじゃ始めるぞい…

両者尋常に…

始め…!!!!」

「わりいな、終わりだ」と海人は百代の目の前に瞬間移動したように現れてそう言った

「な!!!!」

百代は瞬間移動したように現れた海人にビックリし防御をできず海人のパンチを腹に食らった

ドゴオオオオン!!!

と騒音と共に百代は道場の壁にぶつかつた

「チツ…やっぱり「塔」の外だと体のスペックが落ちるな」とそう  
呟いた

「おい、じじい終わったぞ」

「フオフオフオまだまだ終わりじゃないぞ」

「あ?？」

「フフフ、ビックリしたぞ。急に現れたから防御ができなかったぞ」  
海人のパンチを受けたにもかかわらず何事もなかったようにそう呟  
いた

「まあーさすがはあの世界最強武術家の孫娘だけではあるな。さす  
がにあんなんじゃないやられねえーか」

「フフフ。まだ始まったばかりだ。楽しもうではないか。かあああ  
ああああいいいいいいとおおおお!!!!!!!!!」

百代は咆哮をあげながら俺に向かってきた

「いいぜ。来いよ。川神百代!!!」

Trick 8 Twin Snow 5 (後書き)

なんか中途半端な気がする…

Trick 9 Two in snow 6

「チツ…」

「ハハハ!!! さっきの威勢はどうした海人!!!」

百代は海人に向かって殴りのラッシュをしている

海人はエアトレックでバック走しながらきちんと拳をさばきながら避けている

「なめてんじゃねえよ!!!」

百代の殴りのラッシュの中

わずかながら小さな隙を見つけ出し左手を百代の腹の部分に出し崩券を放つ

ドン!!!!!!!

百代はまた壁に吹き飛ばされた

最初のただのパンチではなく

きちんと相手をノックアウトをするように正真正銘本気でやった

しかし百代はまたもや何事も無いように立ち上がった

「フッフ、陳式太極拳か…初めてみたぞ」

「てめえ本当に人間か…今のはけっこーマジでやったぞ」  
冷や汗を掻きながら海人は言う

超回復か…

本当に持っていたんだな…

「塔」のデータもあながち間違えではなかったんだな…

だが、超回復は聞こえはいいが体に相当な負担がかかるはずだ  
なら俺がやることは一つしかねえな…

「それじゃ、そろそろ本気でやるぜ…死ぬなよ。加減はできねえぜ」

目を覚ませ牙!!!!

そう言った瞬間に海人の履いていたエアトレックが反応した

ガキンッ

ガシユと音を出しエアトレックが変形した

黒のエアトレックのシューズは変形した事により神々しい銀色のエ  
アトレックに変わっていた

エアトレックシューズが変わったことにより空気が変わり空間が軋む

「フハハハハハハ！なんだ！！隠し玉があったのか！！いいぞ！  
私はこんな試合がしたかったんだ！！いくぞかいとおおおおお！！  
！！！！」

百代が吼える

海人がエアトレックで一気にトップスピードに乗りストップしながら右足を振り上げる

リヴマイアサン

Levathan

エアトレックはいくつかの道というものがある

海人はそのいくつかの道の一つ血痕の道フラッシュ・ロードを走っている

血痕の道フラッシュ・ロード

「牙」とあだ名されるその道の特徴とはすなわち

キレ

キレとは単なるスピードや瞬発力のことではない

静止状態からの凄まじい0加速

一瞬で到達するトップスピード

そして何よりも重要なトップスピードを瞬時に静止状態に戻すフル

ブレーキング能力。

その0-100-0と言われる過酷な運動の核となるのはやわらかく強靱な太股の筋肉群。

普通の人では牙は打てない

だが、海人は普通の人ではない作られた子である

またその話のちに回すでしょう

MAXスピード 0の制動エネルギーをすべて吸収し回転エネルギーに変換し再び「外」に向かって一気に放出しようとする。

その膨大なエネルギーと牙の道のキレが合わさった時に大気が裂ける。その衝撃波は強大な牙と化する。

「な!!!」

そして百代は牙に飲み込まれた

Trick 10 Two in snow 7

「クハハハハハ！いいぞ！もつとだ！もつと！私を楽しませろ！」

「やっぱり効いてねえか…」

「次はこっちからいくぞっ！！」

「ハハハハハハハハ！」

百代は海人に瞬間的に移動し、猛ラツシユを加える。しかし海人は百代の猛ラツシユを焦らずに捌く

チツ！こうも距離を詰められるときっきのような大きな牙は出せねえ…ならば…

「うぜえ！！！」

海人は百代に向かって無数の牙を放つだが先ほど放った牙ほど大きなものではなく半分ぐらい小さい

「ハハハハ！効かないぞ！！！」

チツ！まさか自分から当たりに行くかよ。だがわざわざ食らってきてるんだ、ありがたいねえ。

「てめえは脳筋か？近すぎてもダメなんだよ」

海人は近づいた百代にみぞおちに崩拳を食らわす

「グツ！ハツ！」

百代は歯を食いしばりながらも海人と距離が離れる。

今でボコる！！

リウマイアサン

Leviathan!!!!!!

海人は数十の牙を百代に放つ

「私をなめるなよ！！川神流奥義 星殺し！！」

しかし百代は体中にあるエネルギーを圧縮した巨大なビームを放つ

数十の牙とビーム

二つの強大なエネルギー同士衝突は床唸り、壁が軋んでいる

この二つの強大なエネルギーは拮抗に張り合いながらも凄まじい光や音を出し衝撃が吹き荒れる

そして、この拮抗は徐々に崩れ始めた

百代が圧され始めたのだ

それもそのはず最初の打撃に崩拳、牙を食らっているのだ

瞬間回復で体力が回復してもダメージは蓄積したまま

それに加えて海人はノーダメージ

有利さといえど誰もが後者を選ぶだろう

「クッ！ッソ！！」

ついには海人の放った牙が百代のビームを破った

Trick 10 Two in snow 7 (後書き)

百代はまだ10歳なので星殺しの威力はあまり高くないと思ってください。

でもやっぱり未プレイは痛いなあー

**T r i c k 1 1 T W O i n S N O W 8 (前書き)**

今回は百代が海斗と小雪と会うまでの話から海斗との戦闘までの百代の話です。

前半後半と分けています。

Trick 11 Two in snow 8

いつからだろう

この欲求が溢れだしたのは…

いつからだろう

私の周りに敵がいなくなったのは…

最初はただ楽しかったただけだった  
私より大きい敵を倒す快感が爽快でとても好きだったから

そして気が付いていたら私は必死に武を磨いていた

より強いを倒すために

よりこの快感を得るために

だけどその想いはすぐに散った

私が武を磨けば磨くほど周りとの差が開くばかりだった

挑んでくる奴らも私の一撃でやられ川神院門下生達もそうだった

唯一私の相手をしてくれるのは川神院の師範代の釈迦堂さん、ルー  
師範代、じじいだけだった

虚しかった

私はただ強いやつと戦いたいだけだったというのに…

そんなある日

道場で今日の訓練のカリキュラムを消費しているとじじいが私と同  
年代ぐらいの二人の子を連れてきた

一人は銀髪の男もう一人は真っ白い髪で白い肌が特徴の女の子

私はじじいと二人歩いて来る瞬間を見たときなにかが体中に電気が  
走った

あの二人は歩き方に一切無駄がなかった  
いつでもどこでもどの方位にも襲われてもすぐに対処できるように一切の  
隙のない歩き方だった

特にあの銀髪は女の子より強いと

名前を聞くと男の名前は海人、女の名前は小雪らしい

私は男のすぐに勝負しろと言った

私の体のなにかがすぐに戦えと疼いている

案の定いきなり言われた事にビックリしているが私には関係ない。  
はやく戦いたいそう思っていた

なあー海人

お前は私の

この疼きを

この渴きを

この虚しさを

満たしてはくれるのか？

勝負にこぎつけた私は海人と向かい合っている

海人はじじいとなにか話をしてじじいが抜けたと思うとじじいがインラインスケートみたいな物を持ってきた

そして海人はじじいからインラインスケートを受け取りシューズを履いてる

私は不機嫌な声で言った。

なめているのかと？

そんなおもちゃで試合するのかもしれない。もし舐めているようなら私は許さない

私は武道家だ。試合を舐めているようなら武道家なら誰だって許さないだろう

しかし海人は特に問題はなさそうに問題ないと言った

そして試合の号令が道場に響いた

号令が鳴り響いた瞬間に私の目の前に海人が現れた

そう急に現れたのだ瞬間移動したように  
私は目にも自信があるが急に瞬間移動したように現れたため防御も  
できずボディに海人のパンチをもらってしまった

パンチの威力はすごく道場の壁にぶつかってしまい壊れてしまった  
が私には関係ないどうせじじいが直すしだろうしな

だが私はいま内心とても嬉しかった

何年ぶりだろうな防御もできずにボディにパンチをもらったのは

フッフ無意識に頬が緩み笑いが込みあがってくる

だがこの程度では私には全然効かないな

そして私は海人に近づきラッシュを繰り出す  
しかし海人はきちんとラッシュを捌いている

フッフこうではなくてはな！！

しかし海人は私のラッシュの中から小さな隙を見つけ出して腹の部  
分に崩拳を放った

ドン！！！！

と鈍い音が私の腹に鳴り響いた

先ほどのパンチとは違ってとても重かった

またも壁にぶつかったが私は倒れている間に冷静に海人の崩拳や型を分析をした

あの型からして陳式太極拳か…

フフフ本当に楽しいな強いやつと戦うのは…

海人の奴は少し冷や汗を流していたが目つきを変えた

その瞬間海人が履いていたシューズが黒色から神々しい銀色に変わりシューズも変化した。

私は興奮したこんな隠し玉があるのかと！！と

そして海人が大きく足を振った

振った瞬間にも目にもハッキリとわかるぐらいの大きな衝撃波が襲い私を飲み込んだ

T r i c k 1 2 T w o i n s n o w 9 (後書き)

展開が遅すぎるよ… (涙)

Trick 13 Two in snow 10 (前書き)

今回で百代の話は終わりです

牙に飲み込まれた百代はまた道場の壁にぶつかりながらもなぜか心は満ち溢れていた。

ああー本当に楽しいな、久しぶりだこの感覚は…この試合がずっと続けばいいと思っていた。今までの挑戦者たちは私が一撃を与えただけですぐにやられてそこでいつも試合は終わる。

しかし今は私の一撃をくらわずにあまつさえ私は倒されている。

こんなに完膚なきまでにやられたのはじじい以来だな…

だけど物事には始まりが始まれば必ず終わりがある。だけど今は心から満ち溢れているこの感覚に身を任せてみようかな。

そして私は一步で海人の前に移動し猛ラッシュを与える。だが海人はまるで問題ないように私のラッシュを捌く。

海人は先ほどとは大きさが半分ぐらい小さくなった無数の衝撃波を放った。

だが私はその衝撃波を避けなかった。さすがに先の大きな衝撃波を食らうのはさすがに堪えるがこの小ささなら別に問題ない。

だが私が前に来たことによって海人はまたもや崩拳を私にお見舞い

する

私は思わず歯を食いしばりながら耐える。崩拳も我慢すれば大丈夫だが急所に当てられるとさすがにきついな…

気がつくとも海人はまたもやトップスピードに乗り大きく足を振りかぶって数十もの衝撃波を放っていた。

私は頭の中で考えた

回避…多すぎて不可能

防御…一発であれだけ体が堪えるので数十も食らったらOUT

ならば迎え撃つ！！

しかし衝撃波を迎え撃つにはあの技しかない！！

つい先週じじいに教わったばかりだから完璧というべきではないがこれしかない！！

川神流奥義 星殺し！！！！

私は体中にあるエネルギーを圧縮した強大なビームを放つ

強大な二つのエネルギー同士の間は衝突は床が唸り、壁が軋む。

しかし私が繰り出した星殺しが押され始めた

やはりダメージの蓄積があったか…

瞬間回復でどうにかなると思っていたがやはり無理だったか…

そして私の星殺しは海人の衝撃波に破られた。

これが負けた瞬間なのか…

負けは悔しいがこうも心が満ち溢れるのはとても気持ちがいいな…

気がつけば一人だった孤独だった

だけど私は想う

よかった…この世界には私より強い人がいた

私は一人ぼっちじゃなかった

目の前にはいつもより鮮やかにみえる無限の大空のビジョンが見えた

Trick 13 Two in snow 10 (後書き)

最後の百代のセリフはエアギアのオルカのセリフです。

自分的に百代とオルカって似ているような気がするんですよ  
天才だからゆえの孤独みたいなの？なので今回のような百代の話を  
執筆したいと思ったわけなんですけど、その分遠回りしちゃいました  
が…

罵倒以外の感想まっていますので、感想の方よろしくお願いします  
！！

それでは！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8881w/>

---

真剣に空に憧れて

2011年10月12日12時52分発行